

第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラムについて

村上, 郷子

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

3

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2022-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026041>

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、002-004

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラムについて

村上郷子

法政大学

1. はじめに

2021年10月16日(土)、第2回韓日メディア情報リテラシー(MIL)フォーラムがオンラインで開催された。本フォーラムのメインテーマは、「インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ」であった。参加者は日本だけで44名、韓国も合わせると約100名以上が参加したと思われる。

日韓 MIL フォーラムは、日韓のメディア情報リテラシーを推進する団体がお互いの活動の交流と協働をめざして交互に開催される。今回は主催が韓国コミュニティ・メディア財団であり、共催は法政大学図書館司書課程およびアジア太平洋メディア情報リテラシー教育センター(AMILEC)であった。

韓国コミュニティ・メディア財団は、「市民・学生向けのリテラシー教育、市民のメディア参加の活性化、障がい者のメディアに対する権利保障などメディア情報リテラシー事業を行う放送通信委員会傘下の政府機関の一つ」⁽¹⁾である。AMILEC(アジア太平洋メディア情報リテラシー教育センター)は、国連およびユネスコの理念に基づき、メディア情報リテラシー教育の普及と発展のためにアジア太平洋地域で活動する非政府組織(NGO)であり、ユネスコ MIL アライアンスの加盟団体でもある。

2. 基調講演・発表の概要

韓国コミュニティ・メディア財団会長チョ・ハンキュウ氏による主催者挨拶の後、法政大学キャリアデザイン学部教授の坂本旬氏による基調講演「異文化間対話とデジタル・シティズンシップのためのメディア情報リテラシー」がビデオ(韓国語字幕付)で発表された。基調講演では、日本のユネスコ MIL の現状、異文化間交流の実践、現在の日本のメディアリテラシー運動および政策をめぐる状況についての報告がなされた。

今回のフォーラムでは、基調講演をはじめ日韓気鋭の研究者や実践者たちの5つの発表すべてがビデオ（日本語もしくは韓国語字幕付）で上映され、休憩を挟んでラウンドテーブル（同時通訳あり）のディスカッションがおこなわれた。

発表セッションのコーディネーターは、韓国コミュニティ・メディア財団の政策研究チームマネージャー、ジャン・ヨンヒ氏であった。第1の発表「デジタル・シティズンシップ教育としてのYouTubeの批判的読解」（日本語字幕付）は、ソウル・コミュニティ・メディアセンター講師のキム・ヒョンジュ氏、パク・ハンナ氏、イ・ジヒョン氏、ユ・ギョンヘ氏の4名によるものであった。この発表は、小学生の子どもだけではなく親をも対象にした批判的ユーチューブ・リテラシー教育プログラムの実践研究という特徴がある。

第2の発表は、光州コミュニティ・メディアセンター講師のソン・ヒョンギ氏による「ケアの対象からケアの主体へ」（日本語字幕付）であった。この発表は、60代、70代が主軸のメディア・ボランティアの高齢者による高齢者を対象にした、高齢者のための教育・記録・企画ボランティアの実践報告である。

第3は、光州コミュニティ・メディアセンター講師のソン・ソンヨン氏、キム・サンウン氏による発表で、タイトルは「学校の内外のヘイトに対抗する」（日本語字幕付）であった。嫌悪感情や嫌悪表現に対抗するための2つのプロジェクトの実践が報告された。

第4は、日本のスマートニュースメディア研究所・研究主幹の山脇岳志氏による発表「スマートニュースによる新たな試み：学校現場でクリティカルシンキングのスキルを伸ばす」（韓国語字幕付）であった。授業実践例、オンラインゲーム教材、出前授業、書籍など、スマートニュースメディア研究所のさまざまな取組みの事例報告がなされた。

最後は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員の今度珠美氏による「日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の実践と課題」（韓国語字幕付）の発表であった。発表では、米国のコモンセンスエデュケーションを土台とした日本の学校におけるデジタル・シティズンシップの教育実践について報告された。

3. ラウンドテーブルの概要

ラウンドテーブル（同時通訳）では、コーディネーターがチェ・スクジン氏（韓国コミュニティ・メディア財団）であり、討論者は韓国からイ・ドンフー氏（仁川（インチョン）大学校）、カン・ジンスク氏（中央（チュンアン）大学校）、キム・スア氏（ソウル国立大学校）の3名、日本からは古田大輔氏（ジャーナリスト/メディコラボ代表）、登丸あすか氏（文京学院大学）の2名が登壇した。ここでは、5人の登壇者によって、先の基調講演や発表についての質疑応答をはじめ、高齢者や子どもたちのメディア参加における課題は何か、「批判的」をどのように論じるべきか、クリティカルシンキング軽視の現状を踏まえ、それをどのように教育・普及していくべきか、なぜ人はフェイクニュースや陰謀論を信じるのか、など多岐にわたる論点についての討論がなされた。議論は白熱を帯び、予定時間を超過しながらも日韓フォーラムは盛況のうちに

幕を閉じた。

- (1) シン・テソプ、[2020年9月6日に開催されたSDGsとMILフォーラムへのご挨拶]より抜粋。 http://amilec.org/?action=common_download_main&upload_id=164 (2022年2月27日最終閲覧)